

## 中川 和紀 氏の学位審査結果の要旨

主査：六車 恵子

副査：上野 博夫、蔦 幸治

加齢黄斑変性は、加齢により網膜の中心にある黄斑の機能障害が生じ、視野の中心が見えにくくなる疾患である。本邦では高齢化と生活の欧米化により近年著しく患者が増加しており、失明原因の第4位に位置づけられている。浸出型では病的な血管（脈絡膜新生血管: CNV）が脈絡膜から網膜色素上皮に発生するため、診断、治療後の経過観察において CNV の状態を正確に評価することが求められる。光干渉断層計アンギオグラフィ（OCTA）は従来眼科で用いられてきた蛍光造影検査とは異なり、造影剤を使用しないため、検査が簡便で患者負担も少なく、造影剤により比較的高頻度に生じる気分不良やアレルギー反応を回避できるため、期待されている検査方法である。今回申請者は、CNV の動物モデルを用い、OCTA の有用性について免疫組織学的解析により検討を行った。その結果、OCTA 画像には CD31 陽性領域の一部に撮像されない領域があることを見出し、この領域が pericyte-like scaffold 特有の線維化組織と相関していることを明らかにした。本研究は、OCTA により CNV を評価する際には、CNV 周辺組織の特性を考慮して読影する必要があることを示唆するものであり、その臨床的意義は大きい。また今後の機器開発においても有用な知見を与えるものである。故に、本研究は学位を授与するに値すると考える。